



珈琲っ子のIT —インターネットの誕生月に寄せて—

かつて、R. Waldinger (The Logical Basis for Computer Programmingの著者) はStanford Research Institute (SRI) で、“Coffee-and-Cookies” (「おやつ時間」とでも訳しておく) と称する場を設け、世界中から集まって来た若手の研究者たちと、ほぼ連日新たな挑戦課題について議論していた。そこには、ITと日常的なコーヒーとが同居していた。これを思い出し、ITの日常性と危うさについて書く。

まずは、我が失敗談を披露する。話はこうだ。今年初めに、某有名コーヒーメーカの「コーヒーのくれたもの」をテーマとしたショートストーリーとエッセイの募集に応募した。賞金はともかく、好きなコーヒーのことだし、かの有名月刊誌「文芸春秋」に入選作が載るというのに惹かれた。エッセイ作成の戦略は、コーヒーを通じて人生を語る。戦術は、人生と自然とを、四行詩とフランスのソネット(14行詩)の作法で表現すること。以下が、出来上がりだ。――

「珈琲っ子四季」

卒寿を迎えた母は遠く離れた老人ホームにいる。

桜の木の下を通過して、久方ぶりに母を訪ねた。弟は言った。母は斑呆けで、調子がよければきちんと話ができるし、呆けているとどんな話題にも相槌を打つと。

ホームの食堂でひとときを過ごす。ケアしてくれている女性が、飲み物はと聞いてくれる。母には紅茶を、僕はコーヒーをストレートで頼む。「和ちゃんは、好きなコーヒーかえ」と母は言った。

子どもの好みには関心を示さなかった母だったが、僕のことを忘れていない、母がそこにいた。老いた母の若い頃の姿がコーヒーのほのかな湯気の中に浮かんだ。

50年余り前、父とだった。その頃は、コーヒーの専門店はごく少なかったから、今で言う喫茶店、パラーでだった。コーヒーとホットケーキだった。苦さと、シロップの甘さが舌の上で踊った。

父は、コーヒーの味を問うた。「苦いけど」と応えた

が、その苦さも香りもうまく表現できずすまない気がした。外に出ると、真夏の太陽。その下でコーヒーは生きていた。

初めての味を教えてくれた父はもういない。

親しい友と、長い並木道を歩いて繁華街に出た。喉が渇いたと通りの店に入り、カフェ・オー・レを注文した。友は、「これが都会に似合うんだ」と言った。

彼は、また言った。「街には極端に違うものがあって、人は息苦しくなるんだ。何となく調和したものを選びたくなるのさ。これがそうなんだ。」

僕は黙って聞いていた。コーヒーとミルクが口の中でせめぎあって、ほろ苦かった。

黄色い落ち葉とこげ茶色の樹々の幹とが目の前をよぎった。

仕事を終えて、夜遅く帰宅する。

冬のダイニングキッチン、暖房せずともなんとなく暖かい。夕餉の香りがほのかに残っている。妻と娘たちの会話が聞こえそう。もう寝てしまったのだろうか。コーヒーを注ぎ、書斎に入る。

冷えた部屋の中で、コーヒーの香りと話す。今日の出来事、考えたこと。

―― 応募前、家族には見せなかったが、これを読んでもくれた同僚の女性は、「分かります」と一言言って涙ぐんだ。もう1人は、「これは、セピア色、ノスタルジーですね」と評した。これはいけると思った。自分の存在がほんの少しかもしれないが理解されていて、多分共感する何かがあるのだ、この文章はいただきだと思った。

結果、選に漏れた。戦略も戦術も、思い込みによる、大いなる失敗。

入選作を読むと、日常を描くことの難しさはともかく、自分のものとそれらには乖離がありすぎた。反省を込めて、20歳の女性芥川賞作家・金原ひとみの「陰惨博打放蕩記」(文芸春秋、2004年8月号)を読んだ、アップ



テンポでズンズン（感覚的に「ドンドン」ではない）分かる、時流のリズムがある。読んでいて楽しく、そして哀しい。でも、芥川賞を受賞するほどの彼女なのに、賢く生きてきたはずの彼女の人生は感じられない。かつて石原慎太郎がその時代を描いた「太陽の季節」（芥川賞作品、1955年）のアナロジーと思えば、それは納得できる。時代を活写して、「今」は読めるのだから。

しかし、宮崎駿のアニメ映画、最近欧米で注目されているThe Amulet of Samarkand（J. StroudのThe Bartimaeus Trilogyの第1部、2003）や10代の女の子F. Bujorの手になるLa Prophétie des Pierres（The Prophecy of the Stones、2002）などのファンタジーから見えてくる、別な「世界」や「時」がない。日本では、映画化されて有名になったJ. R. R. Tolkienの「指輪物語」（The Lord of the Rings）は、1970年代の米国でのベストセラーで、当時の筆者はこの作家のファンタジーに賭ける情熱に興奮した。それに登場するHobbit族の年代記や言葉、とりわけTolkienの言語観が面白かった。この頃のITの世界は、1950年代に生まれたFortranやCobolが主流だったが、Dijkstraの構造的プログラミングなどソフトウェア工学の進展に加え、Simula、CLU、Pascalなどの新たなプログラミング言語が話題であった。人間と機械を結ぶ言語に関心があったせいだろうか。「指輪物語」を読みながら、将来どんなプログラミング言語が出てくるのか、胸が騒いだ。文芸作品を読んでこのように興奮し、さらに新しいイメージを創る、それが読者の仕事だと、僕は思う。

話は飛ぶ。1960年代後半、DoD傘下のARPAが、全米各地で分散して行われる研究開発の情報や成果を効率よく共有し合えるよう計画し、実験的なネットワークARPANETの構築を検討した。1969年11月21日、UCLAとSRIとの間で、最初のARPANETの接続実験が行われた。これが、インターネット誕生の日で、その後、UCSB（カリフォルニア大学サンタバーバラ校）とユタ大学が加わり、この実験ネットワークは拡大していく。ちなみに、日本では、東京工業大学と慶應義塾大学との接続に始まり、東京大学が参加してのJUNETが運用開始されたのは、1984年。1988年には、WIDE（Widely Integrated Distributed Environment）プロジェクトが発足している。今や人口に膾炙する用語「インターネット」にも、30年余りの歳月がある。

コンピュータもインターネットもすでに我々の日常のもので、ユビキタス時代の到来も間近だ。このような中、情報通信技術が生むものもこれから生みそうなものも、一般の人にどれだけの安心や身近さ・日常性を感じさせ、しかも新たな世界やイメージを描かせ、人生を豊かにしていくのだろうか。人間が生み出した道具や機械

も、科学や技術も、宗教や芸術も、文化や文明も、歴史に残るとは言え、弱々しく危うい存在に見える。背景となる知的成果の蓄積は十分だとしても、半世紀余りの歴史しか持たぬITは、やはりそのような存在なのではないか。ITには、新たな世界を拓く力強さはあるものの、日常性が高くなればなるほど、この技術の危うさを感じてしまう。

コーヒーや茶の湯ほどではないが、日常的になりつつある、インターネット電話・インターネットTV、IPv6、RFID、各種Webサービスなどはもちろん、これを支えるITそのものが今よりはもう少し日常的な存在にならないと、情報化社会の危うさなどという議論は専門家の中で終わってしまう。ITの日常性の裏側にある危うさについて、もう少し幅広くCoffee-and-Cookiesしてもよいのではないか。そうでないと、先程の芥川賞作家のものではないが、時代を写すことやその時代の持つ危うさを示すだけで終わってしまう。芸術はそうであっても、我々技術の世界では、それは許されない。

問題を解決する手段の1つとして、ITはある。問題解決がIT技術者の仕事だし、それをより賢明にできるよう新たな知見を明らかにするのが、IT周りの科学者の仕事だ。ITの日常性の裏側に潜む「危うさ」を解決していくことは、我々IT人に課せられた責務だ。このために、一般社会のIT利用者との議論は欠かせない。この辺で、情報処理学会に「子供が夢を語る部会」、「在日外国人が日本で快適に暮らすための部会」、「高齢者や、身体の不自由な人が日常を楽しむ部会」などがあって、幅広い議論ができれば、違った知見が得られるかも知れぬ。

記憶に新しいが、情報通信業者Y社の個人情報漏洩事件で、同社が自主的に顧客にお詫びとして送った金券総額は約23億円と聞く。人材派遣大手T社の9万人分の漏洩事件で、ある弁護士は個人情報1人当たり10万円と査定しているが、これなら総額で90億円の賠償金が必要になる。金額の多寡はともかく、ことの大きさを金額でしか測れないところに問題はないのか。制度でカバーすることで、技術の脆弱性に蓋をしていないか。ITが本来担うべき役割や持つべき機能を、人間に押し付けていないか。

こう考えると、「人間」や「人生」「生活」についての理解をより深めることが、ITの日常性をさらに高め、その危うさを少なくしてくれるに違いない。コーヒーで人生を語れても、ITを題材に人生を語るのは難しい。日常品と日常性を持つものとは異なるが、日常のものや一般の人々の中にこそ、我々技術者の技術観・社会観を深めるものはあり、ITを強固に進化させるヒントがあるのは確かだ。

（平成16年10月8日受付）